大阪・関西万博に寄せるK君の期待

弁護士知財ネット元理事長
弁護士・弁理士　**小松　陽一郎**

1　1970年開催の「EXPO70」の記憶

K君は生粋の大阪人であり、同居しているおじいさんは大阪万博「EXPO70」の体験者である。万博跡地の万博記念公園は、今は日本最大級の大型複合施設といわれる「EXPOCITY」としていつも賑わっている。また、近くにはガンバのホームスタジアム（パナソニックスタジアム吹田）もあり、大阪人にとってこの万博跡地はとても身近な存在である。シンボルの「太陽の塔」をデザインした吹田市のマンホールのふたはいろいろなところで発見でき、マンホーラーはじめ市民にもとても人気がある。

K君のおじいさんからの話では、万博開催前は、「大阪地方の万博は成功しない」、「大阪人はケチだから土産物が売れないだろう」、「大阪人は列を乱す」などと失礼なことをいう人もおり、アメリカのスタンフォード研究所の予想では入場者数は1,850万人とされ先行きに不安を抱いていたが、いざ蓋を開けてみると半年間で日本の人口の約６割の6,422万人強が訪問したんだ、夢溢れる空間の連続だったが、そのときにすごいなあと思った「夢の電話」ワイヤレステレホンが今では当たり前になっているんだねえ、と一部の偏見どこ吹く風でドヤ顔をしている。

2　大阪人への偏見？

K君は、大阪人への偏った印象が今でもあるのではないか、それが開催に影響しないかと少し気にしている。確かに、大阪人は日常的に「ボケとツッコミ」の会話を必須としており、大谷晃一「大阪学」（とりわけ、後書きの難波利三の「解説」には「大阪アレルギー症候群」を紹介している）によれば、違法駐車をよくする・電車を待つのにきちんと並ばない・エスカレータを歩く、等と書かれており、いわれてみればそうかなあとも思うが、一方、大阪はかつては「東洋のマンチェスター」とも呼ばれ1925年には人口が東京より多くなり工業出荷額も日本一（今は２位…）だったこともあり（おじいさん出身の大阪市立西天満小学校の校歌には「大大阪（だいおおさか）の空のもと…」という歌詞がついている）、お笑いの発祥地・こなもんの絶品性・自由平等の学風、等プラス面もいっぱいあるので、この際、全国・世界の人々に大阪研究を体験してもらえたら一気に誤解も解けるいいチャンスではないかと思っている。

3　大阪・関西万博への期待

大阪・関西万博「EXPO2025」のアクションプランによると、大阪万博期間中（約半年）の来場者数は約2,820万人、そのうち国内来場者が約2,470万人（88％）、海外来場者が約350万人と試算している。

K君は、この数字にも大阪人への偏見（自虐）が入っていないかと疑っている。単純な話、海外来場者数と比較すると2024年１～７月までのインバウンド（訪日外国人）数はコロナ前も上回りなんと約2,107万人であり（「EXPO70」の時は年間約85万人）、大阪（と京都）を合わせると地域訪問率は東京を大きく上回っている。したがって、謙虚すぎる試算である。

K君の通うK大学では数ヶ月前に大学公認の学生コミュニティ「万博部」が誕生し、多数の学生が大阪人ののりで積極的に参加準備をしている。K君自身としても、例えば、①企画されている「EXPO70」と「EXPO2025」を結ぶ駅伝「EXPO EKIDEN 2025」にまずは参加したい、②大阪地裁近くの中之島ゲートから次世代船舶（水素燃料電池船）で会場まで行ってみたい、会場では、テーマ「いのち輝く未来社会」に関連して、③最先端の自律学習ロボットを見たいし（介護問題も大きく変化するかもしれない）、④再生医療等の治療分野の最先端技術も見てみたい、⑤いつも気になっているプラスチック廃棄問題や食品ロス問題のテーマを見てみたい、⑥伝統芸能や舞台芸術などの日本文化を紹介する「日本博2.0」のブースを見てみたい（京都国際マンガミュージアムでの「マンガ」も見に行きたい）、また、⑦いつもイベントの跡地利用が問題となるが、「EXPO2025」の成果を実装する「ポスト万博シティ」も計画されているようなので関心を持ち続けたい、などと思っている。

そして、K君は大学で「DX人材」を育成するデータサイエンスや知的財産法を勉強しているので、出展等される最先端技術が特許法等でどのように保護されているのか保護されようとしているのか、著作権や著作隣接権もどう関係するのか、国際的保護はどうなっているのか、等を楽しく勉強してみたい、と今からワクワクしている。おじいちゃんからも、数十年後に社会に定着するはずの「いのち輝く未来社会」を代表する技術等もきっとあるから一緒に探しに行こうな、と言われている。

以　上